

日本国特許庁
PATENT OFFICE
JAPANESE GOVERNMENT

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed
with this Office.

出願年月日

Date of Application: 2000年 5月26日

出願番号

Application Number: 特願2000-156231

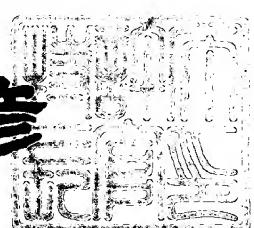
出願人

Applicant(s): 横河電機株式会社

2000年 6月29日

特許庁長官
Commissioner,
Patent Office

近藤 隆彦



出証番号 出証特2000-3053864

【書類名】 特許願

【整理番号】 00A0053

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 C12Q 1/68

【発明者】

【住所又は居所】 東京都武蔵野市中町2丁目9番32号 横河電機株式会
社内

【氏名】 田名綱 健雄

【特許出願人】

【識別番号】 000006507

【氏名又は名称】 横河電機株式会社

【代表者】 内田 黙

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 005326

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 バイオチップ作製方法およびそれを用いたバイオチップ作製装置

【特許請求の範囲】

【請求項1】

DNA、RNA、蛋白、糖鎖等の生体分子を基板上にアレイ状に配置するバイオチップ作製方法において、

前記基板上の各サイトと同一ピッチで配列された複数個のキャピラリからなるキャピラリアレイにより生体分子を基板に付着させるようにしたことを特徴とするバイオチップ作製方法。

【請求項2】

前記生体分子の付着は、キャピラリアレイと基板間に電圧を印加して行なうようにしたことを特徴とする請求項1記載のバイオチップ作製方法。

【請求項3】

前記生体分子の付着は、キャピラリアレイの各キャピラリへの加圧により行なうようにしたことを特徴とする請求項1記載のバイオチップ作製方法。

【請求項4】

前記キャピラリアレイ内のDNAをポリメラーゼの連鎖反応によりキャピラリ内で増幅するようにしたことを特徴とする請求項1記載のバイオチップ作製方法。

【請求項5】

前記ポリメラーゼの連鎖反応における温度処理は、外気温の変化またはレーザ照射による加熱を利用したことを特徴とする請求項5記載のバイオチップ作製方法。

【請求項6】

DNA、RNA、蛋白、糖鎖等の生体分子を基板上にアレイ状に配置するバイオチップ作製装置であって、

バイオチップ上の各サイトと同一ピッチで配列された複数個のキャピラリを保持したキャピラリ保持部材と、

このキャピラリ保持部材または前記基板のいずれか一方または両方を移動させ、キャピラリ保持部材と基板との間隔を調節する手段と、
前記キャピラリから生体分子を前記基板に付着させる手段
を具備したことを特徴とするバイオチップ作製装置。

【請求項7】

前記キャピラリから生体分子を前記基板に付着させる手段は、前記キャピラリ保持部材と前記基板の間に電圧を印加する電圧源を含み、電圧を印加することによりキャピラリ内の生体分子を基板に付着させる構成としたことを特徴とする請求項6記載のバイオチップ作製装置。

【請求項8】

前記キャピラリから生体分子を前記基板に付着させる手段は、前記キャピラリに加圧する加圧手段を含み、キャピラリを加圧することによりキャピラリ内の生体分子を基板に付着させる構成としたことを特徴とする請求項6記載のバイオチップ作製装置。

【請求項9】

前記キャピラリ内のDNAをポリメラーゼの連鎖反応によりキャピラリ内で増幅させる手段を備えたことを特徴とする請求項6または請求項7または請求項8記載のバイオチップ作製装置。

【請求項10】

前記ポリメラーゼの連鎖反応における温度処理は、外気温の変化またはレーザ照射による加熱を利用するように構成したことを特徴とする請求項9記載のバイオチップ作製装置。

【請求項11】

前記基板は垂直方向において前記キャピラリの下側または上側に配置されたことを特徴とする請求項6または請求項7または請求項8または請求項9記載のバイオチップ作製装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、DNA、RNA、蛋白、糖鎖等の生体分子を基板上にアレイ状に配置するいわゆるバイオチップ作製方法および装置の改良に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

DNAチップは一般的に $1 \sim 10 \text{ cm}^2$ の大きさで、この領域に数千～数十万種のDNAを整列したものである。DNAチップの作製方式としては、ポリメラーゼの連鎖反応（PCR）などにより調製したcDNA断片をアレイヤーのピンを利用してスライドガラスやシリコン等の基板に打刻して付着させる方法がよく知られている。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、このような作製方法では、時間がかかり、打刻された各サイト（セルまたはスポットともいう）の品質が均一でなくムラがあり、また少量を付着させることが困難であるという課題があった。

【0004】

本発明の目的は、上記の課題を解決するもので、短時間に品質が均一な生体分子のチップを容易に量産でき、しかも少量の生体分子の付着も容易なバイオチップ作製方法および装置を実現することにある。

【0005】

【課題を解決するための手段】

このような目的を達成するために、請求項1あるいは請求項6の本発明では、DNA、RNA、蛋白、糖鎖等の生体分子を基板上にアレイ状に配置するバイオチップ作製において、前記基板上の各サイトと同一ピッチで配列された複数個のキャピラリからなるキャピラリアレイにより生体分子を基板に付着させるようにしたことを特徴とする。

このような方法によれば、短時間に品質が均一な生体分子のチップを容易に量産できる。

【0006】

生体分子の付着は、請求項2あるいは請求項7のようにキャピラリアレイと基

板間に電圧を印加して電界作用により生体分子を付着させるようにすることができる。

あるいは、請求項3あるいは請求項8のようにキャピラリーアレイの各キャピラリへの加圧により行なうようにすることもできる。

【0007】

また、請求項4あるいは請求項9のようにキャピラリーアレイ内のDNAをポリメラーゼの連鎖反応により増幅するようにすることもでき、キャピラリへのDNA補充作業を省略することができる利点がある。

【0008】

この場合のポリメラーゼの連鎖反応における温度処理には、請求項5あるいは請求項10のように、外気温の変化またはレーザ照射による加熱を利用することができます。

【0009】

さらに、請求項11のように基板はキャピラリの下側または上側のいずれの側にも配置することができ、配置に自由度がある。

【0010】

【発明の実施の形態】

以下実施例につき本発明を詳しく説明する。端面が開口された複数のキャピラリをその端面が同一平面となるようにしてアレイ状に配置し、各キャピラリには必要に応じてそれぞれ異なるDNAを封入する。このキャピラリと平面状の基板を対峙させ両者の間に電圧を印加する。この電圧印加によりキャピラリ内部の溶液は電界の作用で盛り上がり、ピコリットルのオーダで基板にDNAが付着する。

【0011】

このような方法により、短時間で、品質が均一なDNAチップを容易に作製することができる。

図1はこのような方法を用いてDNAチップを作製する装置の一実施例を示す構成図である。

【0012】

図1において、1はキャピラリ、2はキャピラリ保持部材、3は基板、4は電圧源である。

キャピラリ保持部材2には複数個のキャピラリ1が同一ピッチPでアレイ状に取り付けられる。各キャピラリ1にはDNA溶液5が注入されるが、自然状態ではキャピラリ端面から溶液がこぼれ出ないような内径(d)のキャピラリが用いられる。

【0013】

このような各キャピラリ1は、垂直状態でキャピラリ保持部材2に取り付けられ、かつ各キャピラリの下端面が水平方向の同一平面上に揃うように保持部材2に取り付けられている。

【0014】

基板3はDNAチップが形成される基板であり、上面が平面状に形成され、この面とキャピラリ1の端面とが平行になるように配置される。

【0015】

キャピラリ保持部材2と基板3は、そのいずれか一方あるいは両方が垂直方向に移動できるように形成されていて、キャピラリ1の端面と基板1との間隔を適宜に変え得るようになっている。

【0016】

電圧源4は、キャピラリ保持部材2と基板3の間に電圧を印加するもので、例えば基板3側に正極、キャピラリ保持部材2側に負極の電圧を印加する。電圧を印加すると、キャピラリ1の内部の溶液に電界がかかりキャピラリ端面から基板3に向けて溶液が盛り上がる(図1の場合は垂れ下がる)。

【0017】

このような構成における動作を次に説明する。複数個のキャピラリ1の内部に所望のDNA(溶液)を注入しておく。キャピラリ1は十分に細い管(内径がd)のため、表面張力が打ち勝って下端面から溶液が溢れ出るようなことはない。

【0018】

キャピラリ保持部材2と基板3を適度の間隔になるまで近づけておき、キャピラリ保持部材2と基板3の間に適度の電圧を印加する。すると、キャピラリ内部

の溶液は電界の作用により盛り上がり（図1では垂れ下がり）、ピコリットルのオーダで基板3に付着する。

付着後は、電圧印加を中止し、キャピラリ保持部材2を基板3から遠ざける。

【0019】

この場合、キャピラリアレイのピッチPを、目標とするDNAチップの各サイト（セル）のピッチ（P'とする）に一致させておくと、一度に全体の付着が可能となる。そのようにすれば、高速で、付着量にムラのない付着ができる。また、少量のピペットイングも簡単に可能となる。

なお、キャピラリ1の内径dは、ピッチPより小さい条件を満たしていれば十分である。

【0020】

以上の説明は、本発明の説明および例示を目的として特定の好適な実施例を示したに過ぎない。したがって本発明は、上記実施例に限定されることなく、その本質から逸脱しない範囲で更に多くの変更、変形をも含むものである。

【0021】

例えば、電圧印加の代わりに、基板3と反対側から空気等により各キャピラリを加圧するようにしても構わない。

また、基板3とキャピラリは垂直方向において上下逆方向に配置してもよい。基板3の方を上にすると、埃が付着しにくくなるという利点がある。

【0022】

また、各キャピラリ内でPCRを行なうようにしてもよい。PCRを行なえば、各キャピラリへは増幅用の共通の溶液を補充するだけでよく、DNA供給の手間が省ける利点がある。

PCRにおける加熱処理は、外気温の変化またはレーザ照射による加熱を利用すれば、高速にPCRサイクルを回すことができる。なお、レーザを照射する手段としては周知の手段を利用できる。

【0023】

また、本発明によれば、DNAに限らず、RNA、蛋白、糖鎖のチップ作製も可能である。

【0024】

【発明の効果】

以上説明したように本発明によれば、生体分子の入ったアレイ状のキャピラリに電界あるいは空気圧を作用させて基板上の複数のセルに一斉に生体分子を付着させることができるので、チップ作製が高速であると同時に付着量にムラがなく、また少量のピペッティングも可能であるという効果を奏する。

【図面の簡単な説明】

【図1】

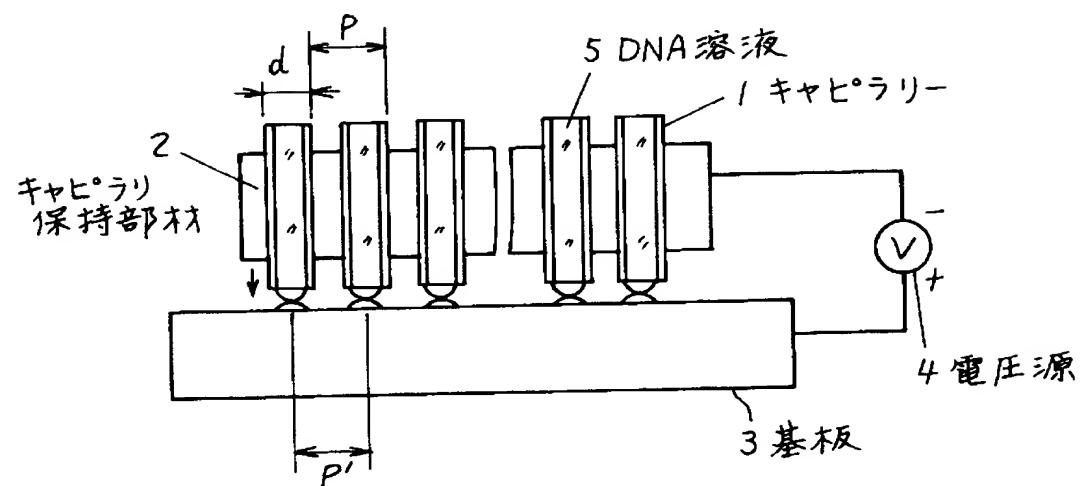
本発明に係るバイオチップ作製装置の一実施例を示す構成図である。

【符号の説明】

- 1 キャピラリ
- 2 キャピラリ保持部材
- 3 基板
- 4 電圧源
- 5 D N A 液

【書類名】 図面

【図1】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 短時間に品質が均一な生体分子のチップを容易に量産でき、しかも少量の生体分子の付着も容易なバイオチップ作製方法および装置を実現する。

【解決手段】 D N A、R N A、蛋白、糖鎖等の生体分子を基板上にアレイ状に配置するバイオチップ作製において、前記基板上の各サイトと同一ピッチで配列された複数個のキャピラリからなるキャピラリアレイにより生体分子を基板に付着させるようとする。

【選択図】 図1

認定・付加情報

特許出願の番号	特願2000-156231
受付番号	50000652315
書類名	特許願
担当官	第五担当上席 0094
作成日	平成12年 5月29日

<認定情報・付加情報>

【提出日】 平成12年 5月26日

次頁無

出願人履歴情報

識別番号 [000006507]

1. 変更年月日 1990年 8月10日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都武藏野市中町2丁目9番32号
氏 名 横河電機株式会社